近現代十巻章研究略史概観

小宮俊海

一　問題の所在

令和五年（二〇二三）は、真言宗の宗祖弘法大師空海（七七四～八三五入定）（以下、空海）が宝亀五年（七七四）六月一五日、四国讃岐国多度郡方田郷（現在、香川県善通寺市）に誕生してから一二五〇年の正当年とされる。[1] この慶事に際し、真言宗智山派（以下、本宗）においても記念法要の勤修をはじめ、各種慶讃事業が遂行されている。[2]

智山伝法院においては、記念出版事業の一貫として今後本宗において初学者が真言教学を修学する際の基礎資料として用いることを目的とした『十巻章　本文編』（以下、『本文編』）及び『十巻章　訓読編』（以下、『訓読編』）の刊行に向け、共同研究を行ってきた。[3]

十巻章（じっかんしょう）とは、空海の教学的著作のうち、主要なもの十巻を総称したものである。その内実は、観如房元瑜（一七五六～一八二六）撰『即身成仏義講翼』巻上（智山書庫二五―五二―三）の冒頭に掲載される配列によると、

『即身成仏義』（以下、『即身義』）一巻・『声字実相義』（以下、『声字義』）一巻・『吽字義』一巻・『弁顕密二教論』（以下、『二教論』）二巻・『秘蔵宝鑰』（以下、『宝鑰』）三巻・『般若心経秘鍵』（以下、『秘鍵』）一巻に真言宗では伝統的に龍猛菩薩造・不空三蔵（七〇五～七七四）訳とされる[4]『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（以下、『菩提心論』）一巻の合計十巻の順となる。

十巻章は、真言教学を修学する上で最も基礎とされるものであり、高野山上などにおいて初学者は思想内容を理解する前段階として師僧より本文を読み聞かせされる「素読（そどく）」という方法により修学が開始されていたとされる[5]。この本文の読み習い方法について、新義門流である根来読みと、高野山の流を伝える南山読みがある。これらが論義の方法や思想解釈などの相違に基づき、伝統的な異同が存在したといわれている。すなわちこれを「読（よみ）曲（くせ）」という。

『本文編』及び『訓読編』作成には、智山書庫蔵聖教の内、近世江戸期の各種版本を用いて本文校訂を行い[6]、それらに付される返り点や訓点、四声点などに基づき、新義・古義の伝統的な読曲が記載されているとされる各種資料を参考として[7]、書き下し文の作成を行った。それにより、浮上した問題点や異同については、『訓読編』所収の各著作末尾に注釈として記載し、適宜参照の可能なものとして提示した。これらにより新義・根来門流である洛東智積院における伝統的な読曲をある程度反映させながらも現代における初学者でも修学に活用することのできる資料として提供できるものを作成したわけである。ここには、二種の目的が混在していることが理解される。

具体的には、智山書庫蔵聖教の江戸期版本を用い、当時の真言宗学の伝統的修学方法の解明をしていく作業を用いたわけであるが、同時に現代の初学者が活用するという観点から近現代おいて真言宗の碩学たちが一般に向

け活字刊行した研究の蓄積も参考として用いている。共同研究に参画した伝法院研究職一同も後者により修学してきたことも事実である。

そこで、本稿では今一度、これら後者の近現代における十巻章に関する研究動向を整理することにより、その一連の研究に対し、読者設定といった目的などについて一定の類型化を試みるものである。これによりどの程度、近現代において新義・古義の伝統的な読曲が反映されてきたのか、また思想解釈にどのように影響を与えてきたのかを今後解明していく際に活用することのできる基礎資料となればと考えている。

二　研究の方法

以上のような問題意識に基づき、それらを解明することが可能な方法論として以下のような手順によって行うことができると考えられる。まず、前述の通り、近現代という一応の時代区分を設けるものの、その研究の蓄積は膨大な量に上る。そのため、一定の資料の選別を行わなければならない。

よって、本稿においては、明治元年（一八六八）～令和五年（二〇二三）一月二一日現在に至るまでに金属活字によって一般に刊行された資料を対象とする。

江戸期には、洛東智積院のみならず新義・古義といった諸山において真言教学を修学する現場では、師資相承による聖教の書写に基づき、講義・講伝といった方法が多く用いられていたことは周知である。これらの伝統教学的修学方法は明治期以降も継承され、活字版が一般に刊行された明治期においても写本による資料は存在している。[8]

また、江戸期においても町版などの版本の流布という状況の変化により修学の現場においても大幅な変革があ

ったことは想像に難くない。[9] これらについては、江戸期の版本を各寺院蔵の聖教典籍より類聚し、刊記や手沢者の識語などを逐次解明した上で論じなければならない。これらの洛東智積院の修学状況の一端については『本文編』「凡例」に譲りたい。[10]

そのため、本稿では基本的には各寺院聖教や写本類は含まず、あくまでも初学者や一般読者が比較的手に取ることが容易な資料を中心に取り扱い、現在、管見の限りにおいて国立国会図書館や各大学図書館といった研究機関にて一般に閲覧可能な資料を活用することとした。[11]

上記の方法を採用する理由は、本稿自体が真言宗の根本教義を解明することを目的とするものではなく、今後、それらの研究を進展させていくためにその前提として現在、一般の社会に発信される書籍刊行といった状況を把握することを主たる目的としているためである。

また、それらを時系列的に一覧し、**【付表】「近現代十巻章研究内容一覧」**を作成し、本稿文末に掲載することにより、近現代における十巻章研究の動向をある程度概観することが可能となると考えている。

さらに、十巻章各著作について検討を加える必要があるが、個別の思想研究の内容については、本稿では紙幅の都合上扱わず、十巻章研究の全体像に対する見通しを提示したい。特に翻刻や訓読（国訳・書き下し）（以下、訓読）の研究、本文読解や本文解説のための逐語的な語句注釈といった本文内容理解を中心に扱う著作を取り上げる。よって、一部例外を除き、[12] 基本的には雑誌掲載の学術論文や空海著作を横断的に論じる教学的学術専門書も対象から除外している。

三　本文影印の全冊掲載

まず、影印については、口絵などに一部掲載するものはいくつか見受けられるものの、十巻章全体に対し、影印資料を全文掲載するものとしては大正大学真言学研究室編『真言宗十巻章』一九六五年（以下、『長谷寺本』）をあげることができる。これは、総本山長谷寺蔵・明治一一年（一八七八）四月一七日再版の版本を掲載している。その他、個別の著作においては、那須政隆『吽字義の解説』一九八五年において、成田山新勝寺蔵・鎌倉期・高野版を底本に用い、不鮮明な箇所を『改正 吽字義』により補っている。

さらに、松本照敬『般若心経秘鍵』一九九〇年の再版二〇一六年には、成田山新勝寺蔵・南北朝期・根来版を用いて『秘鍵』影印全冊を掲載している。[13] このように本文影印の全冊掲載をする物は三種類と極めて少ない。

四　本文の翻刻・校訂研究

次に、十巻章本文に対する翻刻・校訂研究についてみていきたい。現在も十巻章研究において基礎資料として用いられるものである。十巻章全体を網羅的に掲載する叢書類として主要なものを時系列的に提示すると以下のようになる。

まず、『弘法大師全集』（以下、『弘全』）である。これは、長谷宝秀を中心に空海著作を広く集成し編纂したもので、第一輯に『菩提心論』以外が収められている。『菩提心論』は空海の著作ではないので当然であり、空海著作を扱う場合、しばしば除外されることとなる。翻刻に用いられた底本は、万治三年（一六六〇）高野版といわれる版本が用いられ、『即身義』においては御影堂本が対校されている。

次に、『原文対照和訳真言十巻章広付法伝』（以下、『岡田本』）である。これは豊山の学匠で当時大正大学教授であった岡田契昌が十巻章と『広付法伝』の原文全文と訓読を上下に対照させる形で収録したもので、巻頭口絵掲載写真から大正大学蔵の永禄年間・根来版を用いて翻刻並びに訓読を作成したものと考えられる。

三番目に、『大正新脩大蔵経』（以下、『大正』）は大正一四（一九二五）に中国撰述部三二巻・論集部に『菩提心論』、昭和五年（一九三〇）に日本撰述部五七巻・続経疏部二へ『秘鍵』、昭和六年（一九三一）に七七巻・続諸宗部八へ『宝鑰』・『二教論』・『即身義』・『声字義』・『吽字義』を収めている。ここでは、底本として『即身義』・『二教論』において高山寺本を用いている。また、『吽字義』においては東寺宝菩提院本、『宝鑰』では仁和寺本を用いている。対校本として『二教論』や『宝鑰』では東寺観智院本を用いるなどしているものの、『声字義』では徳川期版本、『秘鍵』では『弘全』のみにて校訂されている。『即身義』・『二教論』では対校本として既に『弘全』が用いられていることも注目されよう。

四番目は、『真言宗全書』（以下、『真全』）である。ここでは、八巻に『菩提心論』、一一巻に『宝鑰』、一二巻に『二教論』、一三巻に『即身義』、一四巻に『声字義』、一五巻に『吽字義』、一六巻に『秘鍵』がそれぞれ巻頭に本文を掲載し、関連する注釈書とともに収録されている。しかし、重複を避けて『宝鑰』・『二教論』・『秘鍵』の本文は後に掲載する注釈書に譲っている。その中、底本の判明するものとしては、『即身義』と『菩提心論』が万治三年版を用いている。対校本では、『菩提心論』は『大正』を用い、そして『宝鑰』において本文を譲る『秘蔵宝鑰鈔』・『秘蔵宝鑰勘注』の対校本として、『弘全』・『大正』・『大日本続蔵経』を用い、『二教論』の本文を護る『二教論指光鈔』は『弘全』と『大正』、『秘鍵』の本文を護る『秘鍵開蔵鈔』では『弘全』、『般若心経秘鍵聞書』では『大正』と『弘全』を用いている。このように『弘全』・『大正』を対校本に用いる態度が見受けられるのである。

五番目は、高野山大学編『十巻章 全』（以下、『高野山大学本』）をあげる。これは「凡例」に高野山成福院本を底本とし、対校本に『弘全』と京都山城屋版を用いていることが示されている。[14]

六番目は、『漢和対照十巻章』（以下、『中川本』）である。『中川本』は、「凡例」において特に底本などの明示はないが、本文頭注部の科文を『高野山大学本』と同様に栂尾祥雲『現代語の十巻章と解説』一九七五年（以下、『栂尾本』）より採用した旨を述べる。また、南都東大寺聖守（一二一五～一二九一）が建長三年（一二五一）に『即身義』の開版を行って以来、寺版・町版が重ねられてきたこと、[15]そして、「後序」には、高野山勧学院蔵の版木により明治・大正期には高野紙に刷られた多くの版本が流布したことを報告している。[16]それら版本を始め、中川善教が住持していた高野山親王院蔵の多くの資料を参照したことが示唆され、中でも十巻章不揃いとしながらも親王院蔵『秘鍵』の奥書を紹介し参照しつつ、同じく親王院蔵『高野山本書読法四声仮名声等記』といった読曲資料を用いて、独自に四声点を付したものと考えられる。

七番目は、『真言宗十巻章』である。これは大正大学真言学智山研究室が弘法大師一一五〇年御遠忌記念事業として編纂したものである。これは底本に『弘全』を用い、対校本として『高野大学本』と『長谷寺本』を用いている。また、返点や送り仮名などの訓点は付されていない。これは大学の講義などに用いる際に学生に書き込みを行わせる目的であえて記載されていない。

八番目は、『定本弘法大師全集』（以下、『定弘』）である。これは、高野山密教文化研究所内に弘法大師著作研究会が発足され、各寺院聖教より広く古本・善本を類聚し、それら諸資料に基づき校訂本文を作成している。これにより諸本の異同に関して詳細な注が施され、古層に属する写本を用い、当時可能な限りの古形を復元することを試みている。このような態度から万治三年版に基づく『弘全』とは異なる本文を多く提案していることに特

徴がある。

このように、十巻章所収の各著作により校訂に用いられた資料に関する事情は異なることがわかる。特に『弘全』は万治三年版を中心とした古版本を中心として底本に用いたのに対し、『定弘』は各寺院蔵の古写本を類聚し、校訂したことが窺われる。『大正』に用いられた諸本は他資料と共通するものが見出されるが、詳細な書誌情報が記載されていないため、憶測の域を出ないものがまま見られることがわかる。

五　訓読の研究

前項にあげたような十巻章の活字本文が流布することにより、これらに基づいて訓読による本文の刊行が重ねられることになる。これらがどのような方針のもと、作成されているのかを調査していきたい。十巻章全体にわたり訓読を掲載する主要な著作に以下のものがある。

まず、大正三年（一九一四）に刊行された長松俊恭『真言宗聖典』がある。これは、真言宗所依とされる両部大経や読誦経典、和讃類とともに十巻章全てに総ルビを付し、訓読が収められている。

次は、大正九年（一九二〇）に刊行された塚本賢暁『国訳密教』論釈部一があげられる。適宜、語句に注釈を掲載し、十巻章全てが収録されている。

三番目は、昭和四年（一九二九）に刊行された『昭和新纂国訳大蔵経』宗典部二である。これは総ルビを付し、語句の注釈を掲載し、十巻章全てが収録されている。

四番目は、同じく昭和四年（一九二九）発行の『岡田本』である。これは、永禄年間の根来版に基づき訓読を作成したことが示唆され、新義門流の読みが反映されていることが推測できる。

五番目は、昭和五年（一九三〇）、山本勇夫『高僧名著全集』二である。本書は、総ルビにて訓読、語句の注釈を掲載しており、解説部分を吉祥真雄が著している。この叢書は、日本仏教の各宗祖師の著作を紹介する一部であり、宗派外の一般研究者が参画していることが特徴である。なお、『菩提心論』は収載されていない。

六番目は、昭和九年（一九三四）、高井観海『大蔵経講座』一五・二四である。本書は、『即身義』・『二教論』・『宝鑰』に対して総ルビ、語句注釈を施し、解題・解説を行う。智山の学匠として初めて十巻章に関する一般概説書を著したといえる。

七番目は、『国訳一切経』和漢撰述部である。昭和一二年（一九三七）に諸宗部一〇として、『即身義』・『声字義』・『吽字義』・『宝鑰』を那須政隆、『二教論』を亀井宗忠が担当している。また、昭和一三年（一九三八）には経疏部一七として、『秘鍵』を勝又俊教が担当している。本叢書から特に梵文学による知見を反映した語注が頻繁に登場し、伝統教学を越えた視点が見受けられる。

八番目は、勝又俊教『弘法大師著作全集』一（以下、『勝又本』）である。昭和四三年（一九六八）に刊行され、訓読として現代仮名遣いが使用され、助詞の類を平仮名に開く点に特徴があり、初学者に至便である。なお、『菩提心論』は含まれない。

九番目は、昭和五二年（一九七七）刊行の『中川本』である。これは上部余白に講伝日数が記されており、事相・教相にまたがる真言宗学の伝統的な修学方法としてあげられる講義・講伝・伝授における「講伝資料」として刊行されたものと考えられる。また、師伝による南山読みを反映している。

十番目は、小田慈舟『十巻章講説』上巻・昭和五九年（一九八四）、下巻・昭和六〇年（一九八五）（以下、『小田本』）である。『小田本』は、師資相承に基づく講伝資料として刊行され、読みについては師伝を根拠としてい

ると考えられる。

以上、見てきたように大正期の早い段階において既に訓読研究が登場している。また、大正期から昭和初期にかけての刊行物の多くは、総ルビを付すものが一般的であり、これらの訓読研究も例外ではない。十巻章には内典・外典にわたる多くの難読文字が登場する。これらの語句の読みに関して、総ルビ資料は現代の研究者にとっても大いに有益である。

また、戦前から次第に近代仏教学の知見を反映した語句解説を施す訓読研究が蓄積されていく。それに対して、昭和五〇年代に入ると伝統教学の立場から講伝資料としての十巻章解説が古義を中心になされていくことがわかる。

六　現代語訳を提示した研究

訓読研究の蓄積により、十巻章研究は飛躍的に進展した。ここからさらに新しい展開として、現代語訳を提示した研究が登場する。これによりさらに一般に空海の思想研究が普及していく。

まず、昭和五〇年（一九七五）、『栂尾本』がその嚆矢としてあげられよう。『栂尾本』の目的意識は次のようなものである。「本書は訓読ではなく、さらにこれを現代語化し、ひろく一般の人々にたやすくその内容を知らしめたいという目的である」[17]とする。原文・訓読を一切掲載せず、十巻章全体にわたって現代語訳のみで構成される。『栂尾本』の執筆当時は終戦直後にあたり、経典の現代化、教理の平易化が世論において盛んに唱えられ、それらに応えるため真言密教和訳経典研究会が発足された。本書はその成果である[18]。

次に、昭和五八年（一九八三）、『弘法大師空海全集』（以下、『空海全』）である。これは本宗の弘法大師一一

五〇年御遠忌事業として企画され、本宗の研究者が中心となり、広く高野山・豊山の研究者の参画も実現するかたちで成し遂げられた。上部に『弘全』に基づき、適宜『勝又本』を参照した訓読を載せ、下部に現代語訳を全文にわたり掲載している。なお『空海全』に先立って、宮坂宥勝『人間の種々相』一九六七年や『密教世界の構造』一九八二年などの『宝鑰』に関する一連の研究がある。また、松本照敬が『秘鍵』・『即身義』・『声字義』に対して現代語訳を継続的に提示してきた経緯がある。[19] これらが基礎となって十巻章全体にわたる現代語訳が完成したということができる。なお、『空海全』八には参考として福田亮成による『菩提心論』の現代語訳を収録している。

そして、昭和六三年（一九八八）～平成一八年（二〇〇六）にかけて、福田亮成により『弘法大師に聞くシリーズ』が刊行され、これらは大本山高尾山薬王院の信徒教化誌『高尾山報』に連載されたものである。そのため一般の読者を想定していることが窺える。

続いて、平成一二年（二〇〇〇）から四季社より『傍訳弘法大師空海』が刊行された。このシリーズには『菩提心論』を除いた十巻章が収録される。現代語訳の担当者は『二教論』を『空海全』同様、佐藤隆賢が担当し、それ以外は宮坂宥勝が担当している。

近年における最新の研究として、松長有慶による平成三〇年（二〇一八）の『訳注 般若心経秘鍵』を皮切りに、令和四年（二〇二二）の『訳注 弁顕密二教論』に至るまでの訳注研究がある。これらには『菩提心論』は含まれていない。また、一連の松長有慶の研究に呼応するが如くに弘法大師著作研究会による重厚な研究がある。これらには中世より近現代に至るまでの注釈・研究書を網羅的に参照し、詳細な語釈が付されている。

以上の現代語訳を提示した研究が使用する底本は、『空海全』は『弘全』を使用し、福田亮成は適宜『弘全』

と『定弘』を用い、松長有慶は『定弘』を用いている。

七　まとめと今後の課題

以上、近現代における十巻章の研究略史を編年的に概観した。これらの全体像から把握できる内容として以下のことが指摘できる。

近現代における翻刻・校訂研究の先駆的な功績として『弘全』が大きな役割を果たしている。『大正』・『真全』などの叢書として編纂された原文においても『弘全』が底本あるいは対校本として用いられている。その『弘全』自体は万治三年刊の高野山版がその基礎となっていることがわかる。

一方、『定弘』は各寺院蔵の写本・聖教を底本並びに対校本として用いている点に特色があり、現代の書誌学・聖教調査による成果が反映されている。

さらに進み、訓読研究は、大正期にすでに登場し、昭和初期にかけて総ルビによる訓読研究が多数見られる。そして近代仏教学の知見を反映した研究が見受けられる。一方、伝統教学の立場に基づき、十巻章を解説した講伝資料も刊行されている。

そして、現代語訳を提示した研究として、『栂尾本』があげられ、この研究は十巻章の全体に渡っていることが特筆される。さらに昭和五九年（一九八四）に迎えられた弘法大師空海一一五〇御遠忌事業を契機として、昭和五八年（一九八三）には本宗の碩学が中心となり『空海全』が刊行された。ここにそれまで個別的に研究されていた十巻章研究が組織的に集約されたといえる。これらの現代語訳の研究は、広く一般社会に空海の思想を普及する目的において一貫している。

本稿においては、翻刻・校訂研究、訓読研究、現代語訳研究を概観するにとどまったが、巻末の**【付表】「近現代十巻章研究内容一覧」**についてさらに考察すると、各著作の解説・執筆態度を精査することによって、研究の類型化が可能となるであろう。すなわち、伝統的な修学方法を踏襲するものと新しい地平に空海思想を昇華させようと試みるものとがある。これらの両視点において近年、網羅的に資料の研究を進めている弘法大師著作研究会の成果が今後注目されるであろう。

註

（1）空海の生誕地については、武内孝善が歴史的資料から讃岐国説を否定し、畿内誕生説を提唱している（武内孝善『弘法大師空海の研究』第一部「空海の誕生年次と家系」附論「空海の誕生地」吉川弘文館・二〇〇六年・一二四～一三八頁）。

（2）本宗における宗祖弘法大師空海ご誕生一二五〇年慶讃事業については、本宗ホームページ（https://chisan.or.jp/celebration/：令和五年（二〇二三）一月二〇日現在。以下、ホームページ日付同じ）参照。

（3）智山伝法院編『十巻章 本文編』・『十巻章 訓読編』宗祖弘法大師空海ご誕生一二五〇年慶讃出版事業・本宗発行・二〇二三年刊行予定。

（4）真言宗の伝統説における龍猛菩薩は、空海撰『真言付法伝（略付法伝）』において、「第三の祖は、名づけて那伽閼剌樹那菩提薩埵と曰う。（唐には龍猛菩薩と云う。旧には龍樹と云う。）（中略）出現八百歳、住寿三百歳、顕を伝うる弟子は提婆、首に居し、秘密の法化は龍智室に入る。師資伝灯して今に絶えず。諸宗の始祖は蓋し此れ一人歟」（『弘全』一・五三～五四頁）とあり、大乗の菩薩また八宗の祖龍樹と同一人物と捉えられており、その年齢は三〇〇歳以上を誇ると考えられている。

（5）初学者の修学の開始である素読の様相について、中川善教によれば南都古寺では「稚児読み」、高野山上では「声読み」などと呼ばれていたことが報告されている（『中川本』「後序」一～一三頁）。

（6）智山書庫蔵の享保一七年（一七三二）再治版の内、長彦房堅康（一七六九～不明）・義観房弘現（一八一八～一八七八）・覚本（未詳）がそれぞれ加筆した諸本を校勘に用いた。

（7）『訓読編』に用いた読曲資料は、『十巻章読曲』（智山書庫七

―一〇―四）・『十巻章南山根嶺読書撮要』（赤塚祐道所持本）・『拾巻章読曲備考』（青木恭周所持本）・観応撰『補忘記』（智山書庫講―三）を中心にその読みを参考として用いた。

（8）明治期の十巻章に関する注釈書として『智山学匠目録』（一二五頁上・一二九頁下）を確認すると瑜伽教如撰『秘蔵宝鑰私記』明治六年（一八七三）、存教撰『秘蔵宝鑰補講』明治一二年（一八七九）並びに『秘蔵宝鑰異義雑記』（未詳）などが、現在、写本として智山書庫に所蔵されている。これらは写本・聖教であるため、本稿においてはその範囲とせず扱わない。

（9）藤井隆『日本古典書誌学総説』五章「刊本の種類と名称／刊本の歴史」和泉書院・二〇一一年、一三三～一九二頁参照。

（10）『本文編』「凡例」には、各版本記載の奥書を列記しているので参照されたい。

（11）本宗教師が比較的容易に閲覧可能な資料として、以下の方法を用いる。インターネット検索エンジン「グーグル（https://www.google.com）」を活用し、明治・大正・昭和初期の著作に関しては、国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/）のインターネット一般公開を活用し、その他の資料に関しては、大正大学附属図書館（https://www.lib.tais.ac.jp/）、並びに大正大学真言学智山研究室蔵図書、および本宗総本山智積院別院真福寺図書室蔵図書に基づき資料収集を行った。なお、日本語による研究を用い、海外の研究は取り扱わない。

（12）例えば、松本照敬「現代語訳『般若心経秘鍵』」『成田山仏教研究所紀要』一・一九七六年、松本照敬「現代語訳『即身成仏義』」『成田山仏教研究所紀要』二・一九七七年、松本照敬「現代語訳『声字実相義』」『成田山仏教研究所紀要』五・一九八〇年は、その成果が『空海全』二に一定の反映がなされていると考えられるため割愛するものの、同じく松本照敬「『吽字義』考」『成田山仏教研究所紀要』二五・二〇〇二年は、その後の研究成果を踏まえ、新たに現代語訳を提示しているため掲載する。

（13）中川善教『昭和新訂真言宗常用諸経要聚』高野山出版社・一九七八年は、大坪龍範による『秘鍵』の浄書を掲載するが、読誦用を想定した折本装丁であるので性質を異にしている。本稿に掲載した理由は、宮坂宥勝『傍訳弘法大師　般若心経秘鍵　吽字義』四季社・二〇〇二年において『秘鍵』本文の底本に用いられていたためである。

（14）「一、本書は高野山成福院蔵本を底本とし、京都山城屋版及び弘法大師全集本を参照した。原版は十巻十冊となっているが便宜のため合本して一冊とした」（高野山大学編『十巻章　全』「凡例」一頁）とある。

（15）『中川本』「凡例」二頁。

（16）『中川本』「後序」四～五頁。

（17）『栂尾本』「現代語の秘蔵宝鑰と解説（例言）」四六九頁。

（18）『栂尾本』「あとがき」六五〇頁。

（19）注一二を参照されたい。

【符言】
本稿の成稿にあたり、高野山大学・北川真寛師には資料閲覧に際し、格別なるご配慮を頂いた。ここに記し深謝申し上げます。また、智山伝法院・山本匠一郎師、別所弘淳師より多くのご教示を頂きましたことを合わせて御礼申し上げます。

〈キーワード〉
弘法大師　十巻章　真言教学　真言宗学

【付表】「近現代十巻章研究内容一覧」

［【付表】凡例］

一、本【付表】は、明治期～令和五年（二〇二三）一月二一日現在に至るまでの一般閲覧可能な十巻章に関する解説書を管見により可能な限り年代順に一覧とした。

一、各著作に通し番号を付し、上部に書誌情報を、下部に掲載内容を一覧とした。

一、書誌情報のうち、「和暦」・「西暦」は、刊行年（初版）。「書名」は、書籍名。「編著者」は、主要編著者名。「発行元」は、出版社等。「収録」は、十巻章における収録著作の順とした。

一、「収録」の十巻章収録著作の略号は以下の通り。
十巻章全巻→「十」、『即身義』→「即」、『声字義』→「声」、『吽字義』→「吽」、『二教論』→「二」、『秘鍵』→「秘」、『宝鑰』→「宝」、『菩提心論』→「菩」。

一、掲載内容の一覧は、以下の順である。
「影印」は、原文全冊影印の有無。「原文」は、漢文原文全文掲載の有無。「底本」は、原文底本の提示有無。「対校」は、原文対校本の提示有無。「訓読」は、原文全文訓読の有無。「参考」は、訓読参考本の提示有無。「現代語」は、全文現代語訳の掲載有無。「解説」は、解説の執筆態度。「語釈」は、逐語釈・典拠注の掲載有無。

一、「解説」は、便宜的に著作の全体像、または適宜原文に対して「大意」等と解説するものは「解題」、原文全文に対して逐文的に解説するものは「逐文」と表記した。

一、記載の例外は、適宜文字表記した。

No.	和暦	西暦	書名	編著者	発行元	収録	影印	原文	底本	対校	訓読	参考	現代語	解説	語釈
1	明治二四	一八九一	訓点校正金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論	前田実心	山田保延堂	菩	×	○	×	×	×	×	×	×	×
2	明治三三	一九〇〇	秘蔵宝鑰講義	寺島光法	哲学館	宝	×	○	×	×	×	×	×	解題・逐文	×
3	明治四二	一九〇九	即身成仏義講義	釈慶淳	光融館	即	×	○	×	×	○	×	×	解題・逐文	×
4	明治四三	一九一〇	弘法大師全集一	祖風宣揚会・長谷宝秀	六大新報社	菩以外	×	○	万治三年版	御影堂本他	×	×	×	×	×
5	大正三	一九一四	真言宗聖典	長松俊恭	平楽寺書店	十	×	×	×	×	○	×	×	×	×
6	大正五	一九一六	日本大蔵経一六	松本文三郎・中野達慧	日本大蔵経編纂会	菩	×	○	談義記・勘文本他	×	×	×	×	×	×
7	大正七	一九一八	日本大蔵経三五	松本文三郎・中野達慧	日本大蔵経編纂会	秘	×	○	開蔵鈔本・開書本	×	×	×	×	×	×
8	大正八	一九一九	般若心経秘鍵講義	吉祥真雄	藤井佐兵衛	秘	×	○	×	×	○	×	×	解題・逐文	○
9	大正九	一九二〇	菩提心論講義	吉祥真雄	六大新報社	菩	×	○	×	×	○	×	○	解題・逐文	×
10	大正九	一九二〇	国訳密教論釈部一	塚本賢暁	国書刊行会	十	×	×	×	×	○	×	×	×	○

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
昭和八	昭和八	昭和六	昭和六	昭和五	昭和五	昭和四	昭和四	大正一五	大正一四	大正一三
一九三三	一九三三	一九三一	一九三一	一九三〇	一九三〇	一九二九	一九二九	一九二六	一九二五	一九二四
真言宗全書一四	真言宗全書一三	大正新脩大蔵経七七	照遍和尚全集一	大正新脩大蔵経五七	高僧名著全集二	原文対照和訳真言十巻章広付法伝	昭和新纂国訳大蔵経　宗典部二	菩提心論講話	大正新脩大蔵経三二	秘蔵宝鑰の大綱
高岡隆心	高岡隆心	大正大蔵経刊行会	上田照遍	大正大蔵経刊行会	山本勇夫	岡田契昌	国訳大蔵経編輯部	吉祥真雄	大正大蔵経刊行会	金山繆韶
真言宗全書刊行会	真言宗全書刊行会	大蔵出版	照遍和尚全集刊行会	大蔵出版	平凡社	宗典発行所	東方書院	藤井佐兵衛	大蔵出版	六大新報社
声	即	宝二即声吽	声秘以外	秘	即二秘宝	十	十	菩	菩	宝
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
○	○	○	×	○	×	○	×	○	○	部分
×	万治三年版	万治三年版	×	弘全	×	永禄根来版	×	×	高麗版	×
×	×	高野山本	×	×	×	×	×	×	縮蔵	×
×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
解題（別巻）	解題（別巻）	×	解題（漢文）	×	解題	解題	×	解題・逐文	×	解題・逐文
×	×	×	漢文	×	○	×	○	×	×	×

No.	和暦	西暦	書名	編著者	発行元	収録	影印	原文	底本	対校	訓読	参考	現代語	解説	語釈
22	昭和九	一九三四	真言宗全書一五	高岡隆心	真言宗全書刊行会	吽	×	○	×	×	×	×	×	解題（別巻）	×
23	昭和九	一九三四	大蔵経講座一五	高井観海	東方書院	即二	×	○	×	×	○	×	×	解題・逐文	○
24	昭和九	一九三四	即身成仏義講義	吉祥真雄	藤井佐兵衛	即	×	○	×	×	○	×	○	解題・逐文	○
25	昭和九	一九三四	大蔵経講座二四	高井観海	東方書院	宝	×	○	×	×	○	×	×	解題・逐文	○
26	昭和九	一九三四	邦訳秘蔵宝鑰	田中海応	豊山派御遠忌事務局	宝	×	×	×	×	×	×	○	解題	○
27	昭和一〇	一九三五	真言宗全書一六	高岡隆心	真言宗全書刊行会	秘	×	○	開蔵鈔本・開書本	大正・弘全	×	×	×	解題（別巻）	×
28	昭和一〇	一九三五	真言宗全書一二	高岡隆心	真言宗全書刊行会	二	×	○	指光鈔本	大正・弘全	×	×	×	解題（別巻）	×
29	昭和一〇	一九三五	真言宗全書八	高岡隆心	真言宗全書刊行会	著	×	○	万治三年版	大正	×	×	×	解題（別巻）	×
30	昭和一一	一九三六	真言宗全書一一	高岡隆心	真言宗全書刊行会	宝	×	○	宝鑰鈔本・勘注本	大正他	×	×	×	解題（別巻）	×
31	昭和一二	一九三七	国訳一切経和漢撰述諸宗部二〇	那須政隆・亀井宗忠	大東出版社	宝即声吽二	×	×	×	×	○	戒定等	×	解題・逐文	戒定等
32	昭和一三	一九三八	国訳一切経和漢撰述経疏部一七	勝又俊教	大東出版社	秘	×	×	×	×	○	大正・頼瑜・宥快	×	解題・逐文	頼瑜・宥快

33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
昭和一六	昭和一八	昭和二〇	昭和二一	昭和四〇	昭和四一	昭和四二	昭和四三	昭和五〇	昭和五一	昭和五二
一九四一	一九四三	一九四五	一九四六	一九六五	一九六六	一九六七	一九六八	一九七五	一九七六	一九七七
十巻章　全	日本真言の哲学	十巻章玄談上	十巻章玄談下	真言宗十巻章	智山文庫六 即身成仏義講要	人間の種々相	弘法大師著作全集一	現代語の十巻章と解説	般若心経と心経秘鍵に聞く	漢和対照十巻章
高野山大学	金山繆韶・柳田謙十郎	長谷宝秀	長谷宝秀	大正大真言学研究室	芙蓉良順	宮坂宥勝	勝又俊教	栂尾祥雲	宮崎忍勝	中川善教
高野山大学出版	弘文堂書房	六大新報社	六大新報社	金羊社	智山派宗務庁	筑摩書房	山喜房仏書林	高野山出版社	教育新潮社	高野山出版社
十	宝	即声吽二	宝秘菩	十	即	宝	菩以外	十	秘	十
×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×
○	×	×	×	○	○	×	×	×	○	○
成福院本	×	×	×	長谷寺本	×	×	×	×	×	親王院本他
山城版・弘全	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	部分	部分	部分	×	○	部分	○	×	○	○
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	師伝
×	部分	×	×	×	×	部分	×	○	×	×
×	解題・逐文	解題	解題	×	解題・逐文	解題	解題（別巻）	解題	解題・逐文	解題
×	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×

No.	和暦	西暦	書名	編著者	発行元	収録	影印	原文	底本	対校	訓読	参考	現代語	解説	語釈
44	昭和五二	一九七七	仏典講座三二	勝又俊教	大蔵出版	秘宝	×	○	×	×	○	×	×	解題・逐文	○
45	昭和五三	一九七八	昭和新訂真言宗常用諸経要聚	中川善教	高野山出版社	秘	大坪龍範書	×	×	×	○	×	×	×	×
46	昭和五五	一九八〇	即身成仏義の解説	那須政隆	成田山仏教研究所	即	×	○	×	×	○	師伝	×	解題・逐文	○
47	昭和五七	一九八二	密教世界の構造	宮坂宥勝	筑摩書房	宝	×	×	×	×	部分	×	部分	解題・逐文	×
48	昭和五七	一九八二	声字実相義の解説	那須政隆	成田山仏教研究所	声	×	×	×	×	○	師伝	×	解題・逐文	○
49	昭和五八	一九八三	弘法大師空海全集二	空海全編輯委員会・宮坂宥勝他	筑摩書房	菩以外	×	×	×	×	○	弘全・勝又本	○	解題・逐文	○
50	昭和五九	一九八四	口語訳秘蔵宝鑰	加藤隆純	世界聖典刊行協会	宝	×	×	×	×	○	弘全	○	解題	○
51	昭和五九	一九八四	十巻章講説上	小田慈舟	高野山出版社	即声吽	×	○	×	×	○	師伝	×	解題・逐文	○
52	昭和六〇	一九八五	十巻章講説下	小田慈舟	高野山出版社	二宝秘菩	×	○	×	×	○	師伝	×	解題・逐文	○
53	昭和六〇	一九八五	空海　即身成仏義	金岡秀友	太陽出版	即	×	○	万治三年版	御影堂本	○	×	○	解題	○

63	62	61	60	59	58	57	56	55	54
平成五	平成二	昭和六三	昭和六三	昭和六三	昭和六二	昭和六一	昭和六一	昭和六〇	昭和六〇
一九九三	一九九〇	一九八八	一九八八	一九八八	一九八七	一九八六	一九八六	一九八五	一九八五
岩波講座日本文学と仏教一	成田山選書七　般若心経秘鍵　二〇一六年再版に影印有り	大乗仏典中国・日本八　中国密教	日本の仏典二　空海	弘法大師に聞くシリーズ一　般若心経秘鍵	弁顕密二教論の解説	空海　般若心経秘鍵	真言宗十巻章	吽字義の解説	弘法大師空海全集八
岡村圭真	松本照敬	頼富本宏	頼富本宏	福田亮成	那須政隆	金岡秀友	大正大学真言学智山研究室	那須政隆	空海全編輯委員会・福田亮成
岩波書店	成田山仏教研究所	中央公論社	筑摩書房	ノンブル社	成田山仏教研究所	太陽出版	智山派御遠忌奉修局	成田山仏教研究所	筑摩書房
即	秘	菩	二即声 吽秘	秘	二	秘	十	吽	菩
×	南北朝根来版	×	×	×	×	×	×	鎌倉高野版	×
×	×	×	×	○	○	○	○	○	×
×	×	×	×	弘全	×	×	弘全	×	×
×	×	×	×	×	×	×	高野山大学本・長谷寺本	×	×
部分	○	×	○	○	○	○	×	○	○
×	×	×	弘全	弘全	師伝	×	×	師伝	×
×	○	○	×	○	×	○	×	×	○
解題	解題	解題	解題・逐文	解題・逐文	解題・逐文	解題	×	解題・逐文	×
×	○	○	○	○	○	○	×	○	○

No.	和暦	西暦	書名	編著者	発行元	収録	影印	原文	底本	対校	訓読	参考	現代語	解説	語釈
64	平成六	一九九四	定本弘法大師全集三	弘法大師著作研究会	密教文化研究所	菩以外	×	○	高山寺本・東大寺本他	高野山本・東寺本他	×	×	×	解題	×
65	平成六	一九九四	弘法大師に聞くシリーズ二　秘蔵宝鑰	福田亮成	ノンブル社	宝	×	○	×	×	○	×	○	解題・逐文	○
66	平成六	一九九四	空海と『般若心経』のこころ	池口恵観	講談社	秘	×	×	×	×	○	×	×	解題・逐文	×
67	平成八	一九九六	小田慈舟大僧正伝授「十巻章」素読解説	大沢聖観・栗山秀純	北辰堂	十	×	×	×	×	×	×	×	×	×
68	平成八	一九九六	弘法大師に聞くシリーズ三　現代語訳即身成仏義	福田亮成	ノンブル社	即	×	×	×	×	○	×	○	解題・逐文	○
69	平成一一	一九九九	般若心経秘鍵講義	坂田光全	高野山出版社	秘	×	○	高野山大学本	×	○	著者	×	解題・逐文	○
70	平成一二	二〇〇〇	講本弘法大師著作集	勝又俊教	山喜房仏書林	菩以外	×	×	×	×	○	×	×	×	○
71	平成一二	二〇〇〇	傍訳　秘蔵宝鑰上	宮坂宥勝	四季社	宝	×	○	×	×	○	×	○	解題・逐文	○
72	平成一二	二〇〇〇	傍訳　秘蔵宝鑰下	宮坂宥勝	四季社	宝	×	○	×	×	○	×	○	解題・逐文	○
73	平成一三	二〇〇一	弘法大師に聞くシリーズ五　現代語訳弁顕密二教論	福田亮成	ノンブル社	二	×	×	×	×	○	×	×	解題・逐文	×

74	平成一四	二〇〇二	『吽字義』考　成田山仏教研究所紀要二五	松本照敬	成田山仏教研究所	吽	×	×	○	定弘	○	解題	○
75	平成一四	二〇〇二	傍訳　即身成仏義　声字実相義	宮坂宥勝	四季社	即声	×	○	×	定弘	×	○	解題	○
76	平成一四	二〇〇二	傍訳　般若心経秘鍵　吽字義	宮坂宥勝	四季社	秘吽	×	○	定弘	×	○	○	解題	○
77	平成一四	二〇〇二	傍訳　弁顕密二教論	佐藤隆賢	四季社	二	×	○	×	×	○	空海全	解題	○
78	平成一四	二〇〇二	弘法大師に聞くシリーズ六　現代語訳　声字実相義	福田亮成	ノンブル社	声	×	○	×	×	○	×	解題・逐文	○
79	平成一四	二〇〇二	弘法大師・空海を読む	加藤精一	大法輪閣	即二秘	×	×	×	×	○	×	解題・逐文	×
80	平成一五	二〇〇三	詳解般若心経秘鍵	新開真堂	青山社	秘	×	○	高野山大学本	×	○	×	解題・逐文	○
81	平成一五	二〇〇三	空海　弁顕密二教論	金岡秀友	太陽出版	二	×	×	×	×	○	済暹他	解題	○
82	平成一六	二〇〇四	密教瞑想から読む般若心経	越智淳仁	大法輪閣	秘	×	×	×	×	○	×	解題・逐文	○
83	平成一六	二〇〇四	般若心経秘鍵入門	村岡空	大覚寺出版部	秘	×	○	定弘	×	○	定弘	解題・逐文	○

No.	和暦	西暦	書名	編著者	発行元	収録	影印	原文	底本	対校	訓読	参考	現代語	解説	語釈
84	平成一六	二〇〇四	空海コレクション一	宮坂宥勝	筑摩書房	宝二	×	×	×	×	○	弘全・空海全・定弘	部分	解題・逐文	○
85	平成一六	二〇〇四	空海コレクション二	宮坂宥勝	筑摩書房	即声 吽秘	×	×	×	×	○	弘全・定弘	部分	解題・逐文	○
86	平成一七	二〇〇五	即身成仏義を読む	岡村圭真	高野大通信教育室	即	×	○	定弘	×	定弘	中川本	×	解題・逐文	梅尾本・小田本
87	平成一七	二〇〇五	弘法大師に聞くシリーズ七　現代語訳吽字義	福田亮成	ノンブル社	吽	×	○	×	×	○	×	○	解題・逐文	○
88	平成一八	二〇〇六	空海　般若心経の秘密を読み解く	松長有慶	春秋社	秘	×	○	定弘	×	○	中川本	○	解題・逐文	○
89	平成一八	二〇〇六	弘法大師に聞くシリーズ別巻　現代語訳菩提心論	福田亮成	ノンブル社	菩	×	○	×	×	○	×	○	解題・逐文	○
90	平成一九	二〇〇七	空海の哲学『声字実相義』	北尾克三郎	プロスパー企画	声	×	×	×	×	部分	×	○	解題・逐文	×
91	平成二〇	二〇〇八	密教・自心の探求	生井智紹	大法輪閣	菩	×	×	×	×	○	高野山大学本	○	×	×
92	平成二二	二〇一〇	ビギナーズ日本の思想　空海「秘蔵宝鑰」	加藤純隆・加藤精一	角川学芸出版	宝	×	×	×	×	×	口語訳宝鑰	○	解題	○

93	平成二三	二〇一一	ビギナーズ日本の思想　空海「般若心経秘鍵」	加藤精一	角川学芸出版	秘	×	×	×
94	平成二四	二〇一二	『般若心経秘鍵』解説	長尾豊喜	星雲社	秘	×	×	×
95	平成二五	二〇一三	ビギナーズ日本の思想　空海「即身成仏義」「声字実相義」「吽字義」	加藤精一	角川学芸出版	即声吽	×	×	×
96	平成二六	二〇一四	空海の思想	竹内信夫	筑摩書房	即声	×	○	×
97	平成二六	二〇一四	ビギナーズ日本の思想　空海「弁顕密二教論」	加藤精一	角川学芸出版	二	×	×	×
98	平成二八	二〇一六	空海教学の真髄	村上保壽	法藏館	菩以外	×	×	×
99	平成二九	二〇一七	『秘蔵宝鑰』の研究　密教文化研究所紀要別冊	弘法大師著作研究会	密教文化研究所	宝	×	○	定弘
100	平成二九	二〇一七	空海に学ぶ仏教入門	吉村均	筑摩書房	宝	×	×	×
101	平成二九	二〇一七	現代日本語訳空海の秘蔵宝鑰	正木晃	春秋社	宝	×	×	×
102	平成二九	二〇一七	『秘蔵宝鑰』の研究　第二分冊　密教文化研究所紀要別冊	弘法大師著作研究会	密教文化研究所	宝	×	○	定弘
93	94	95	96	97	98	99	100	101	102

No.	和暦	西暦	書名	編著者	発行元	収録	影印	原文	底本	対校	訓読	参考	現代語	解説	語釈
103	平成三〇	二〇一八	『秘蔵宝鑰』の研究 第三分冊　密教文化研究所紀要別冊	弘法大師著作研究会	密教文化研究所	宝	×	○	定弘	×	○	定弘・中川本	○	×	○
104	平成三〇	二〇一八	訳注　般若心経秘鍵	松長有慶	春秋社	秘	×	○	定弘	×	○	中川本	×	解題・逐文	○
105	平成三〇	二〇一八	訳注　秘蔵宝鑰	松長有慶	春秋社	宝	×	×	×	×	○	弘全・定弘・中川本	○	解題・逐文	○
106	平成三一	二〇一九	訳注　即身成仏義	松長有慶	春秋社	即	×	○	定弘	定弘・弘全	○	弘全・中川本	○	解題・逐文	○
107	令和一	二〇二〇	空海の般若心経	村上保壽	セルバ出版	秘	×	×	×	×	部分	×	部分	解題・逐文	○
108	令和一	二〇二〇	空海の哲学	竹村牧男	講談社	即	×	×	×	×	○	定弘	×	解題・逐文	×
109	令和一	二〇二〇	『即身成仏義』の研究 密教文化研究所紀要別冊	弘法大師著作研究会	密教文化研究所	即	×	○	定弘	×	○	定弘・中川本	○	×	○
110	令和一	二〇二〇	『声字実相義』の研究 密教文化研究所紀要別冊	弘法大師著作研究会	密教文化研究所	声	×	○	定弘	×	○	定弘・中川本	○	×	○
111	令和一	二〇二〇	訳注　声字実相義	松長有慶	春秋社	声	×	○	定弘	弘全・中川本	○	弘全・中川本	○	解題・逐文	○

112	令和二	二〇二〇	般若心経の神髄	小峰彌彦	里文出版	秘	×	×	×	×	×	×	×	部分	×	部分	解題・逐文	×
113	令和二	二〇二〇	『秘蔵宝鑰』を読む	竹村牧男	春秋社	宝	×	×	×	×	×	○	弘全	部分	解題・逐文	○
114	令和二	二〇二〇	空海「秘蔵宝鑰」を読む	福田亮成	国書刊行会	宝	×	×	×	×	部分	勝又本	部分	解題・逐文	×
115	令和二	二〇二〇	菩提心論の解明	北尾隆心	東方出版	菩	×	○	著者所持本	×	○	師伝	○	解題・逐文	○
116	令和三	二〇二一	『吽字義』の研究　密教文化研究所紀要別冊	弘法大師著作研究会	密教文化研究所	吽	×	○	定弘	×	○	定弘・中川本	×	解題・逐文	×
117	令和三	二〇二一	訳注　吽字義釈	松長有慶	春秋社	吽	×	○	定弘	弘全・中川本	○	弘全・中川本	○	解題・逐文	○
118	令和三	二〇二一	般若心経秘鍵への招待	高野山布教研究所	法藏館	秘	×	×	×	×	○	定弘・中川本	○	解題・逐文	×
119	令和三	二〇二一	空海の言語哲学	竹村牧男	春秋社	声	×	×	×	×	○	定弘・那須他	○	解題・逐文	×
120	令和三	二〇二一	校注　菩提心論	大柴清圓	大遍照院	菩	×	○	三十帖策子本	三千院本他	○	大柴本他	×	逐文	○
121	令和四	二〇二二	訳注　弁顕密二教論	松長有慶	春秋社	二	×	×	×	×	○	弘全・定弘・中川本	○	解題・逐文	○
122	令和四	二〇二二	『弁顕密二教論』の研究　密教文化研究所紀要別冊	弘法大師著作研究会	密教文化研究所	二	×	○	定弘	×	○	定弘・中川本	○	×	○